イルハン朝期のイドラール (idrār)
 ——モンゴルのイラン支配の一齣——⁽¹⁾

Idrār in the Ilkhanid State

岩 武 昭 男^{*}
 IWATAKE Akio

ABSTRACT With regard to *idrār* in the Ilkhanid state, a famous scholar Petrushevsky wrote as below in the volume 5 of the *Cambridge History of Iran* thirty years ago:

Apart from the fief of the military nobility (*iqṭāʿ*) there existed conditional grants of land and rent to members of the bureaucracy and the religious bodies. The grant for life of rent in kind (corn, barley, rice) or money was called *maʿīshat* (Arabic literally “livelihood”) and when granted into heredity (*maurūth*) or when it was “eternal” (*abadī*) it was called *idrār* (literally “pension”). Often such a grant was replaced by the grant of a village of the Dīvān, the income (=amount of taxes) from which equalled the sum of the *maʿīshat* or the *idrār*.

Now we have new sources on *idrār*, however. They are two large waqf endowment deeds, *Waqfnāma-yi Rabʿ-i Rashīdī* of Rashīd al-Dīn Faḍl-allāh Hamadānī, and *Jāmiʿ al-Khayrāt* of the Nizām family, composed by Shams al-Dīn Muḥammad b. Rukn al-Dīn Muḥammad, who got married with Rashīd’s daughter and was a *nāʾib* of Rashīd’s son, wazīr Ghiyāth al-Dīn Muḥammad.

The former deed, *Waqfnāma-yi Rabʿ-i Rashīdī*, records *idrārs* imposed on Tabriz and many hamlets in three districts (*nāḥiya*) around Tabriz, which were made into *waqfs*: 1795 dinār from allowances (*iḥtisābiyāt*) fixed on Tabriz and its suburb, and 1295 dinār from taxes and *qopchur* tax laid on the districts.

The latter deeds, *Jāmiʿ al-Khayrāt*, contains forty-four *waqf* endowment deeds or summaries of *waqfs*. Of them, seventeen deeds made *idrārs* into *waqfs*. All of them were made *waqfs* by Shams al-Dīn Muḥammad. Only

* 関西学院大学文学部
 Kwansei Gakuin University

one of them, 1000 dinār, had been a bequest of his father, Rukn al-Dīn Muḥammad, a part of which sheikhs and scholars of Yazd donated to him and the rest of which was left from generation to generation in the family. Fifteen of them was stipends which Shams al-Dīn Muḥammad gained the profits from taxes on different hamlets or cities as Yazd, Tabriz, Qum and others, the total of which is over 8000 dinār.

According to analysis of these documents, *idrār* can be clearly defined as pension or stipend for beneficiaries in cash, based on and expended from a definite tax imposed on a definite city or hamlet. It was a beneficiary's right of property which he could bequeath and transmit by sale. It was not such as 'fief' or 'grant of land and rent' as Petrushevsky defined. Naṣir al-Dīn's tract on finance, which Petrushevsky also used as one of his sources, specifies *idrār* as stipend, and the examples of deeds about *idrār* contained in Nakhchiwānī's *Dastūr al-Kātib*, which he analyzed as his main source, wrote *idrār* from *tamghā* tax or *jizya* tax of *dhimmī*. The documentation of these deeds and sources makes us reconsider the feudalistic notion about the Mongol domination.

中央アジア・西アジアにおけるモンゴル支配時代の歴史に関する研究は、モンゴル帝国史の一環としての考察とイスラーム世界史の一事象としての考察とに大きく乖離してきた。この状況は、前者の立場からペルシア語史料の利用を本格化させてきた近年の我が国の研究状況においても、依然そのままであるように見える。⁽²⁾しかしながら、歴史学研究の理想からいえば、研究者の用いる史料言語はもとより、いわば「先入見」に基づく、研究者の都合にあわせての歴史像の提示が厳に避けられねばならないことは、改めてここで述べるまでもないであろう。

小稿では、「イドラール (*idrār*)」の名称で知られる、イルハン朝史研究においてこれまで土地制度の範疇で語られてきた制度の実態を探る作業を通じて、イランのイスラーム社会とモンゴルによる支配の関わりを、その一端でも明らかにすることを目的とする。

I

モンゴル支配時代の土地所有形態を中心とした社会経済制度に関して、現在でも参照されている古典的研究としては、周知のごとく、『ケンブリッジ・イラン史』の第5巻に掲載されたペトルシェーフスキー Petrushevsky の“The Socio-Economic Condition of Iran under the Īl-Khāns”を挙げることができ⁽³⁾る。

そこでペトルシェーフスキーは、イドラールに関して、同種のマイーシャト (ma'ishat) とともに次のように定義している。

軍事貴族の封土 [fief] (iqṭā') とは別に、官僚機構や宗教層のメンバーに対する、土地と小作料の条件付き下賜 [grants] もあった。現物 (穀類・大麦・米) か現金での小作料の一代の下賜は、マイーシャト (アラビア語での原義は「生計費」) と呼ばれ、相続されうる (maurūth) 下賜か「永遠」(abadi) である場合では、それはイドラール (原義は「年金」[pansion]) と呼ばれた。時に、このような下賜は、マイーシャトかイドラールの額に収益 (= 税収)⁽⁴⁾ が等しいディーワーンの村落によって置き換えられた。

ペトルシェーフスキーの研究は、土地の下賜を中心に考察しており、「モンゴル」の特質としてそう捉えたのかもしくは「中世」の特質として捉えたかは判断できないが、「封建」概念をアプリオリにイルハン朝モンゴル政権の諸制度の前提として⁽⁵⁾いる。これまでの研究によって、イルハン朝領域、さらに同時代のイスラーム世界全般に関して、イクター制を中心とする制度に「封建」概念を持ち込むことに関しては、否定的な意見が主流とな⁽⁶⁾っている。そのような中で、イルハン朝史研究、特に先に記したモンゴル帝国史としてのイルハン朝史研究には、未だ色濃くその概念が反映しているのが現況である。⁽⁷⁾

現在では、ペトルシェーフスキーが使い得なかった諸史料、特に文書史料が我々の手許にある。その中には、イルハン朝期の社会経済史にとって、最も重要な文献——『集史』——を残し、かつ大土地所有者として最も典型的なサンプルとして扱われてきたラシードウッディーン Rashid al-Dīn Faḍl-allāh Hamadānī [以下、ラシードとする] が、自ら得ていたイドラールを記す文書史料も含まれている。以下では、まず、これらの文書史料の分析を行った上で、改めて、ペトルシェーフスキーの論の検証を行うことにする。

II

ラシードは、『ラシード区ワクフ文書』の709年ラビー I 月 1 日 (1309年 8 月 9 日) 付け登録の本体において、タブリーズのワクフ物件として、イドラールを組み入れている。このワクフ文書本体のワクフ物件登録は、「以前のワクフ」と「新しいワクフ」を併せて、上記の日付で登録したものであり、以下に示す記述は「新しいワクフ」に属することになる。

それをこの地所 (mawḍiʿ⁽¹⁰⁾) とともに、永遠の恩寵と議論の余地のない ^(a)イドラールとして (bar sabil-i inʿām-i mudām wa idrār-i bi-lā kalām), この僕に下賜され、ディーワーン税 (kharāji diwāni)——それは、この弱き者が所有するいくつかの地所に対し定められており、それもまたソユールガーミーシー (suyūrghāmishi) と ^(b)イドラールとしてこの僕に委ねられたのだが——[そのディーワーン税] から、毎年、[以下に] 詳述される額の ^(c)イドラールが、完全に (ba tamām wa kamāl), その集団に (ba ān jamāʿat) 至っているが、[それは] その報いたる祝福が幸運なる日々に結びつくようにである。

この詳細を、ワクフ文書として (bar sabil-i waqfiya), 私は書き、法に適い信頼できる供述 (iqrār) と宣誓 (iʿtirāf) をもって、[次のように] 供述し宣誓した (muqirr wa muʿtarif shudam)。[すなわち] 私は、このカーヌーンによって定められた付加税 (mutawajjihāt-i muqarrar-i muqannan), および、その決められた土地税 (kharāj-i muʿayyan) に関し、詳述なされるように、法に適ったやり方で、彼らの ^(d)イドラールにふさわしい額を、子孫のワクフの法判断が既になされているように、その説明が後に行われる諸条件で、彼らの名と詳細な説明が [以下に] なされる集団と、子々孫々彼らの子孫たち (awlād wa aʿqāb) の ^(e)イドラールとして、永遠のものとして、設定した。

それから残ったあらゆるものには、以前のワクフ文書に記されているワクフ物件の収益に [関する] 法判断 (ḥukm-i ḥāṣil-i mawqūfāti dārad) があり、半分が、既述の条件によってこの弱き者の子供と (子供の) 子供に対してであり、半分が、敬虔の諸門 (Abwāb al-Birr) [慈善施設] ラシード区 (Rabʿ-i Rashidi) に対してである。私が、新たにその敬虔の諸門において増額した使途の額は、既述の同じ条件により、この前述の [後者の] 半分に属す。ラシード区のワクフ物件のムタワッリーには、今後のどの時代において

も永遠に、その権利の資格として、毎年、この付加税と税の全額を完全に掌握、支配し、おおよそ既に記され、つまびらかに今後語られるであろうように、決定された使途に用いることに定められている。この全体の詳細と注記は、以下に記されるようにである。

以上、訳出した箇所、「イドラール」の語は計5カ所現れる。ここから「イドラール」という言葉が、ほぼ3通りの意味を含んでいることが判る。すなわち、

1. ディーワーン税から支出される「年金」[下線(a)と(c)]
2. 自分の所有財のディーワーン税の付与 [下線(b)]
3. ワクフの収益からの受益者に対する支出 [下線(c)と(d)と(e)]

である。まず、2のケースは、結果的にディーワーン税の免除を意味することになるが、ディーワーン税から受け取るということで、制度上の概念としては1と区別して考える必要はないといえる。1と3、特に下線(c)の場合は、多少読みとりにくい、下線(c)の「イドラール」の至る「その集団 (ān jamā'at)」が、次段落の下線(d)(e)の関わる「彼ら」「彼らの名と詳細な説明が[以下に]なされる集団と、子々孫々彼らの子孫たち」と判断できるので、ラシードが下賜された「イドラール」(1と2のケース)をワクフに組み込み、ワクフ文書に特定される者たちにその規定に従って支給されるものも「イドラール」と呼んでいる(3のケース)と考えられる。このように考えると三者は、ペトルシェーフスキーも示す「イドラール」の本来の意味の「年金」であり、ラシードが受け取るものも、ラシードのワクフを通じて支給されるものも、どちらもこの「年金」を意味する言葉で呼ばれていると解することができる。どちらにしろ、最終段落で示されるようにディーワーン税から支出される現金の支給であることは明確である。そして、このようなイドラールが、下線(b)に見られるように、モンゴル語に基づき「恩寵」を意味する「ソユールガーミーシー」の語と併記⁽¹²⁾されているのである。

ラシードは、上記の記述に続いて、1のラシードが受け取るべきものでワクフに組み込んだイドラールを、2項目に分けて列挙している。第1は、

タブリーズとその付属地において、説明が後になされるように、至高の命令により、この弱者に[対して]、確認を与えること、永久のものとすること、所有権を移転することを通じて (az sabil-i ta'yid wa takhlid wa

tamlik), 定められ委ねられている, 支給の定められたもの (muqarrar-i ihtisāb[iy]āt)

として, 「流通貨幣 (naqd-i rā'ij) で, 1795ディーナール」。第2は,

通りを伴う [?] 諸地域の税とコプチュル税からのもの (bābat 'an al-māl wa 'l-quṣṣūr bi-al-nawāḥi bi-mā fi-hi shawāri')

として, 「流通貨幣で, 1295ディーナール」。後者に関しては, さらに細かく, 地域別にまとめて村落ごとの「税額」=「イドラール額」を列挙している。今, 地域別の項目だけ挙げると,

Arwanaq 2 か村で 536 dīnār $\frac{1}{6}$ (dāng)

Rūdqāt 4 か村で 50 dīnār $\frac{4}{6} + \frac{1}{24}$ (chār-dāng tassū'i)

Mīhrānrūd 9 か村で 708 dīnār $\frac{1}{24}$ (tassū'i)

⁽¹⁴⁾となる。この2項目から, ラシードが, タブリーズの支給分と諸地域の税とコプチュル税から, イドラールを獲得し, ワクフに組み込んでいたことが確認できる。

以上からだけでも, ペトルシェーフスキーの記述を正すことは可能であるが, ほぼ同時代のワクフ文書に, ワクフ化されたイドラールに関するさらに詳細な記述が我々の手許に存在している。

III

地方都市ヤズドのサイドの名家ニザーム家に属す, その町のカーディーであったルクヌッディーン Rukn al-Dīn Muḥammad Ibn Niẓām Yazdī, およびルクヌッディーンの子シャムスッディーン Shams al-Dīn Abū 'Abd-allāh Muḥammad——彼は, ラシードの娘婿であり, ラシードの子(すなわち彼の義兄弟)でイルハン朝末期にワズィールとなったギヤースッディーン・ムハンマド Ghiyāth al-Dīn Muḥammad のナイーブにもなり, 中央に進出した——の両者は, 彼らのワクフを登録したワクフ文書集『慈善集』によって知られる。この文書集は, このシャムスッディーンによってまとめられ, 733年ラジャブ月28日⁽¹⁵⁾ (1333年4月14日)に認可を受けたものである。この文書集に文書もしくはその説明の納められた44件のワクフの内, 17件にイドラールが追加登録されて⁽¹⁶⁾いる。

そこでの記述は、様々なヴァリエーションを持つが、典型となる記述をまず文書〈II-4〉（アバルクーフ在のハーンカーへのワクフ）から提示しておく、以下のものである。

上述のハーンカーのワクフ物件に流通貨幣で計 360 ディーナールを加えた。それは、アバルクーフの税に基づいて（‘alā amwāl Abarqūh）、ワーキフ〔ワクフ設定者〕——彼の支えの強くならんことを——の名で支出されるイ
⁽¹⁷⁾
 ドラールの一部である。

おおよそこのように、すでに設定しているワクフに追加するものとして、1. 金額、2. 支出の財源〔某地の税（amwāl）、付加税（mutawajjihāt）、その他「に基づいて（‘alā）」もしくは「より（min）」〕、3. 名目〔「ワーキフの」「彼の高貴な」「彼の祝福された」等の「名で（bi-ismi）」〕が共通して書かれ、さらに、4. 官庁書類上の登録に関する言及〔ディーワーンの「原簿（dafātīr）」「指示書（dasātīr）」「（徴税）規定書（mu‘amarāt）」⁽¹⁸⁾「において（fi）」〕が書かれることもあり、最後に「支出される（もの）」「定められている（もの）」「確立されている（もの）」等の文言が「イドラール」の語や 1 の金額を修飾して（もしくは述語になって）提示される形式をとる。

17件の内、文書〈III-14〉（アバルクーフの Masjīd al-Lawḥ へのワクフ）での 50 ディーナールのみ、「アバルクーフの付加税より、Masjīd al-Lawḥ のイマームの名でディーワーンの前簿において支出されるものである。」として、ワクフ設定者とは異なる名目となっている。また、〈III-1〉〈III-2〉はイドラールとともにマイーシャトを含んでいる。今〈III-14〉とマイーシャト分を除いた 16 件を、以下に、文書番号、金額、財源地域、典拠の順で列挙すると次のようになる。

〈II- 3〉	1000 dīnār	Yazd	72/445
〈II- 4〉	360 dīnār	Abarqūh	74-75/447
〈II- 5〉	500 dīnār	Kāshān	78/450
〈II- 6〉	360 dīnār	Nā’in	80/451
〈III- 1〉	920 dīnār	Yazd	106/472
〈III- 2〉	1000 dīnār	Yazd	117/480-81
〈III- 3〉	200 dīnār	Yazd	120/483
〈III- 8〉	360 dīnār	Yazd	127/489

	500 dīnār	Nā'in	
〈III-11〉	301 dīnār $\frac{2}{3}$	Yazd	135/496
	(166 dīnār	qarya 'Aqdā)	
	(135 dīnār	qarya Haftādar)	
〈III-12〉	96 dīnār $\frac{2}{3}$	Natanz, Zabarqand	138-39/498
	65 dīnār	Natanz, Jūshqān	
〈III-13〉	836 dīnār $\frac{1}{2}$	Abārquh	140/500
〈III-15〉	360 dīnār	Abārquh	145/504
〈III-16〉	520 dīnār	Kāzirūn	146/504-05
〈III-17〉	720 dīnār	Tabrīz	147/505
〈III-18〉	500 dīnār	Qum	148/506
〈III-19〉	405 dīnār	Yazd	149/507-08
	405 dīnār	Yazd	154/511

ここに現れるのは、すべて II 群・III 群の文書群、すなわち子のシャムスッディーンをワーキフ [ワクフ設定者] とするワクフに限られている。その事情は、文書<II-3>(ルクヌッディーンの解放奴隷へのワクフ：ワクフ設定者＝シャムスッディーン) の記述より明らかになる。

彼は、上述の解放奴隷に対するこれらのワクフ物件に、流通貨幣で計1000 ディーナールを加えた。それは、彼の父である奴隷解放者 (al-mu'tiq), al-mawlā al-murtaḍā al-a'zam al-sa'id Rukn al-Ḥaqq wa 'l-Dīn Muḥammad ——神がその慈悲で守り給わんことを——の名で、ヤズド市のディーワーンの税と [不明 1 語] の付加税に基づいて ('alā al-amwāl al-diwāniyya bi balda Yazd wa al-mutawajjihāt ... bi-hā) 支出されるものである。このイドラールの一部は、その父祖たちより、一部は、ヤズド在住のサイイドやイマームたちより、al-mawlā al-murtaḍā al-sa'id に譲渡されたものであるが (muntaqilan ilā... min...), 彼の名に、原簿と指示書において変更されたものである。

シャムスッディーンが父の遺志について設定した II 群のワクフにおいて、このイドラールも父よりシャムスッディーンが受け継いで、父の遺志を継いでのワクフとして新たに組み入れたことが判る。⁽¹⁹⁾ イドラールが、「父祖たちより」の「譲渡」、すなわち相続と、「ヤズド在住のサイイドやイマームたちより」の「譲渡」、

すなわち売買や贈与の対象となりえることが、ここで確認でき、ルクヌッディーンは、そのようなイドラルを生前にワクフ化しておらず、シャムスッディーンがさらに相続し、ここで新たにワクフに組み込んだことになる。

一方、その他の15件のイドラルに関しては、先に訳出した文書〈II-4〉や下記に訳出する記述からも判るとおり、それぞれの文書での設定者、すなわちシャムスッディーンが、自身の獲得していたイドラルを各ワクフに追加登録していったといえる。イドラルの獲得に関しては、地方のカーディーで留まった父が生涯に獲得しえたのは、1000ディーナールにすぎず、子の中央に進出したシャムスッディーンは、ヤズドのみならずコムやタブリーズにおけるものまで、ワクフ化した「一部」のものだけで15件の合計、計8409ディーナール $\frac{5}{6}$ もの額を取得していたのである。

さらに、シャムスッディーンもまた父と同様にイドラルの受益権を他者からの譲渡（おそらく購入）によって獲得していたことが、文書〈III-19〉（解放奴隷へのワクフ）に見える。

彼は、これに、純銀 (talghamiyya) の流通貨幣で、計405ディーナールを加えた。[それは] al-mawlā al-Wāqif——彼の支えが偉大なることを——の名で支出されるもので、故 Jamāl al-Dīn の相続人たちの所有権の譲渡(intiqāl)により、ヤズドの付加税よりイドラルとして規定書に確立したものの一部である。

さて、前節でラシードの文書に見えるイドラルの語の用い方を、3種に分けたが、本節での『慈善集』の個々の事例より再び考察してみると、先に挙げた文書〈II-4〉〈II-3〉〈III-19〉の例では、はっきりと前節の分類の1、すなわち「ディーワーンの税から支出される「年金」として、イドラルの意味が用いられている。同種の文言として、もう1例を挙げると、文書〈III-17〉（ラシード区のハーンカーへのワクフ）で

彼は、タブリーズの西の郊外のラシード区にあるハーンカーに、タブリーズの所有財や占有財 (amlāk-h wa mutaṣarrifāt-h) のいくつかを既にそのワクフ文書 (kitāb waqfiyya-hā) 冒頭に定めたように、ワクフしていたが、それに流通貨幣で計720ディーナールを加えた。それは、タブリーズのディーワーン税に基づいてイドラルとして支出されるもので、ディーワーンの原簿と規定書に明示されている。

3, すなわち「ワクフの収益からの受益者に対する支出」としてのイドラールの語の用法は、文書<II-5>（カーシャーン在のハーンカーへのワクフ）において、

彼はまた、このハーンカーのワクフ物件に、流通貨幣で計 500 ディーナールを加えた。それは、彼の高貴な名で、カーシャーン市のディーワーンの税に基づき（‘alā al-amwāl al-diwāniyya bi balda Kāshān），原簿と指示書上に署名されたものである。そのイドラールの受領の権利のある対象者は、そこでの滞在者、そこへの到来者、そこからの出発者の集団である。

明確に 2 にあたるケースは見られないが、このニザーム家のワクフ文書集においてもラシードのワクフ文書とイドラールの内実は同様であるといえる。

IV

以上の分析によって、「イドラール」とは、受益の権利のあるものに対する、原則的に、ディーワーンからの額面の定まった現金の支給であり、都市や村落に対する様々な税収より支出されるものであることが判る。また、この受益の権利は、相続や売買による譲渡の対象ともなりえ、いわば受益権利者の所有財（milk）と同等に扱われていたことも確認できる（ゆえにワクフ設定が可能となり、ワクフ文書に登録されることになる）。以上の例に、土地そのものの下賜をうかがわせるような要素は、何一つない。

しかし、イルハン朝成立以前から、イスラーム世界では、イドラールとはそもそもそのようなものであった。イルハン朝の初期、ナスィールッディーン・トゥーシー Naṣīr al-Dīn Ṭūsī によるモンゴルに対する著名な建白書に次のような進言が見える。

かつての帝王たちがさまざまな理由から土地税（kharāj）を設定しなかった土地とバグがあり、それは ḥurr と呼ばれている。その土地の価格はより高いものであった。また、土地税が免除されている者たちがおり、それのある地域では isqāt と呼び、ある地域では mawḍū‘ と呼んでいる。また、idrār として現金（zar）が定められている者があり、彼らの土地税の徴収分において運用されるか、生計費（ma‘īshat）として彼らに与えられる。この 3 つ、すなわち hurr, isqāt, idrār は、相続により譲渡されえ、互いに売買されえる。人々の財産であり定収入と考えられており、いかなる時にも無効とさ

れえない。チングス＝ハンの大ヤサは、人々の財産が少なくならないように、⁽²⁰⁾それらが定められているとしている。

引用文中に下線で示したように、イドラールとは、土地税の徴収分において運用されることを一つの手段とする現金での支給であり、相続されえ、売買されえる永久の権利である。このことは、II節で見た『ラシード区ワクフ文書』、III節で見た『慈善集』の各記述とも一致する。トゥースィーの建白がそのまま尊重されたかはともかく、また、ここでの「チングス＝ハンの大ヤサ」での規定をうかがわせるような記事が事実であるかはともかく、少なくともイルハン朝のイラン支配の最初期から、モンゴル政権によってイドラールが受け入れられ、トゥースィーの建白に描かれた原則を逸脱することなく運営されていたことが、ワクフ文書の分析より明らかになったものと思われる。

V

ペトルシェーフスキーは、小稿I節で掲げた定義の文章を書く際、典拠の一つとして、前節で示したトゥースィーの建白を見ていた。しかし、その記述をあえてとらず、もっぱらナフチヴァーニー Muḥammad Nakhchiwānīの『書記典範』の記事のみに基づいて執筆している。

『書記典範』の第2巻に「イドラールとムカーッサに関して (dar idrār wa muqāṣṣa)」の節があり、そこでは、「イドラール」と「ムカーッサ」の語釈をした後、⁽²¹⁾3通の授与文書の文例を掲載している。そして、その語釈の箇所では、次のように語られている。

イドラールとは、帝王たちが権利ある者たちの誰かに恩寵を下し (in'ām farmāyand)、その者の後は、その子孫に永遠に定め委ねる金額 (wajh) である。ムカーッサとは、その金額の代わりに、ディーワーニー (ディーワーニー地) の地所 (mawḍi'ī diwānī) を永遠の所有権移転によって (ba-tamlīk-i abadi)、イドラールの所有者とその子々孫々に委ねるものである。

そこに掲載される3通の文書例は、1通が「イドラールそのもの (idrār fa-ḥasb)」であり、上記の語義、およびこれまで見てきた通りに、「タブリーズの税と付加税に基づいて (az aṣl-i māl wa mutawajjihāt-i Tabriz)」毎年、そして永遠に受益対象者とその子孫に現金 (文書上では1800ディーナール) が渡されることがタブリーズの官吏 (mutaṣarrifān) と書記 (bitikjiyān) に命じられ

ている。ただし、ペトルシェーフスキーの述べるような「土地と小作料の条件付き下賜」とは読みとれない。また、このような授与文書においては、相続権は明記されるものの、売買可能であるとは記されていない。

問題となるのは他の2通であり、「ムカーッサによるイドラール (idrār ba-muqāṣṣa)」の表題を持つ2通の文書例が掲載される。第1の文書例は、イドラールの額を「某地域の某村もしくは某のタムガ税 (tamghā) に適用して (ba-mutawajjih) ムカーッサし (muqāṣṣa karda)、ディーワーン⁽²²⁾の原簿 (dafātir-i dīwān) において彼の名に永遠に確定する」ことが、第2の文書例では、同じように「某地所のズィンマの民のジズヤに適用してムカーッサする」ことが命じられている。この文書例内容が、そのままペトルシェーフスキーに採られている（「[その] 額に収益 (= 税金) が等しいディーワーンの村落によって置き換えられた」）。確かに、第2の文書において、この権利の受益者である「彼らをその村の所有者および占有者 (mālik wa mutaṣarrif-i ān dīh), もしくはそのタムガ税の統括者と独占者 (ḥākim wa mutaṣarrif-i ān tamghā) と知り」という文言を含み、上掲の語釈における「ムカーッサ」の定義を考えると、単純に村落の授与を意味しているかのようにも考えられる。

しかし、そもそも「ムカーッサ」とは「相殺」「決済」を意味する言葉であり、本来ディーワーンから直接支出すべきイドラールの額を税額の一一致する徴税対象の徴税権の授与で「相殺」するケースを別範疇に分類したにすぎない。そうであるからこそ、第1の文書例で「村落」か「タムガ税」と併記し、第2の文書例で「ズィンマの民のジズヤ」としているのであり、ナフチヴァーニーがつけた語釈のような「ディーワーニー (ディーワーニー地) の地所」だけが問題とされているわけではないし、土地をそのまま授与しているわけでもない。

ペトルシェーフスキーの言説は、彼が中心の典拠とする史料の再分析によっても、もはや受け入れがたいものとなったといえる。そして、このことは、ラシードにしロニザーム家にしロワクフ登録したイドラールが、各地に分散していることから、また、それぞれがかなり少額の金額によって構成されていること (II節, III節のリストを参照) から、いえることである。独占的に税金を自分のものとする「所領」が形成されていたわけでは決していない。地方ごとに、さらにいえば村落ごとに細かく設定されたものの集積としてのイドラールの存在からは、むしろイメージにおいて「近代」的な社会の在りようを示し

ているとさえいえるであろう。

VI

ラムトンは、イルハン朝期のファールスの経済・財務の実態を扱った論文の中で、『ワッサーフ史』よりイドラルの運営の実態をうかがわせる興味深い事例を紹介している。⁽²³⁾それは、著者であるワッサーフの代理人が耕作を行っていた地所（おそらくワッサーフの所有地）に対して、あるサイドのイドラルが定められていたという状況において、一年の収穫に関して土地税の徴税官（*ṣāhib-i kharāj*）に回答する際、当のサイドが不在で、ディーワーンの税額だけが取られて、イドラル分が支払われないままになってしまった、というものである。

このことより、原則的には国庫からの現金の支出であったものが、実務上は、受益権利者が実際に割当地から受領するという形態であったことが判明する。イルハン朝政権は、バラート（*barāt*）（割付証、支払命令書）による支払実行のシステム（仮にこれをバラート＝システムと呼ぶことにする）が採られていたことが知られている。⁽²⁴⁾先にワクフ文書上で、ワクフ化されワクフの受益者が受益権利者になっているものもイドラルの言葉のままで表されていることを示したが、ワクフの運営自体もバラートによって行われていた。『慈善集』文書〈III-2〉（ダールッスィヤードへのワクフ）において、その管理運営者集団（ムタワッリー、ナーズィル、ムシュリフ）の義務として次のように定められている。

毎年2度出向き、ワクフ物件の収益とイドラルより…[して]、それを確認し、定められた使途にしたがって分配し、必要に応じてバラートを書き、⁽²⁵⁾署名する。

また、『書記典範』の3通の内の第2の文書例において、「ムカーッサ」の場合に、ディーワーンの官吏と書記は、「バラートの更新（*istijād-i barawāt*）」を行わず、そこに対してバラートを書かない、と国家の制度上でのバラート＝システムを確認させると同時に、被徴税者側に受益権利者のバラートを持たない場合は何も与えてはいけなと警告を与えていて、やはり民間のレベルでもバラート体制が浸透していたことを示している。⁽²⁶⁾『慈善集』において、ディーワーンの「原簿」「指示書」「（徴税）規定書」での登録の確認を繰り返し記載し

ていることもこのようなシステムに基づくといえる。

イドラルの受益者が、税収からの割当を受ける都市や村落から直接受領する形態をとっていたことが、年代記史料等に表面的に記載され、これまでの研究者たちにとすれば土地の下賜というような「封建体制」的なイメージを醸成してきたともいえるが、本質は大きく異なる。前節末ではイドラルをむしろ「近代」的なイメージとして提示したが、ここで確認した実務面での「前近代」性（「封建」性とは異なる）とのバランスを常に前提とすることが、イルハン朝支配期のイラン社会を考察する上で必要となるのである。

このようなイドラルが、『ラシード区ワクフ文書』では「ソユールガーミーシー」というモンゴル起源の「恩寵」を表す語と併記されていた。モンゴルが持ち込んだ概念に、自らが伝統的にもつ行政制度を柔軟にあてはめ運営していく、ここに、モンゴル支配に対応したイラン＝イスラーム社会の一つのかたちを見ることができるといえるだろう。そして、ラシードやニザーム家のシャムスッディーンのような者たちは、イドラルを集積していくことによって富を獲得できたのであり、⁽²⁷⁾ 後者の事例から、その機会は国家機構の上位にいくほど増大したことが判る。

彼らの経済活動の解明は、土地の獲得手段、所有形態の分析と組み合わせてのことになるが、それは小稿の扱う範囲を超えることになる。小稿は、「イドラル」の一制度に限定して論じてきたが、その他の様々の制度も、史料上「ソユールガーミーシー」と併記されることがあり、イルハン朝においては、⁽²⁸⁾ 「イクター」もまたそうであったことを最後に付言しておく。

注

- (1) 小稿は、日本中東学会第14回年次総会（1998年5月10日、於四天王寺国際仏教大学）での口頭発表の一部である。多くの方々から有益な助言をいただき論文文化することができたこと、記して謝意を称したい。
- (2) 両者の立場は、杉山正明が繰り返し主張するように、研究の出発点より、漢文文献とペルシア語文献という東西二大史料の利用という史料上の問題でおおよそ区別ができたが、本田実信の実績に基づき、前者の立場、すなわちモンゴル帝国史研究の立場からのペルシア語文献の利用が近年我が国で活発になってきている（最新の論考として『岩波講座 世界歴史11 中央ユーラシアの統合』（岩波書店 1997）所収の杉山正明「中央ユーラシアの歴史構造——世界史をつないだもの——」、志茂碩敏「モンゴルとペルシア語史書——遊牧国家史研究の再検討——」を挙げえる）。現在の研究状況に關

- する筆者の見解は、『集史』研究を中心に、「ラシード著作全集の編纂——『ワッサーフ史』著者自筆写本の記述より——」『東洋学報』78-4(1997), pp.1, 18-19 参照。
- (3) I. P. Petrushevsky, “The Socio-Economic Condition of Iran under the Il-khāns”, *The Cambridge History of Iran*, vol.5, Cambridge 1968.
- (4) Ibid., p.520. 文中の [] 内にテキストの表記を挙げる。
- (5) 引用文が含まれる節のタイトル自体が, “Feudal Relationships. The Categories of Landownership” とされている。
- (6) イルハン朝期のイクター制に関しては, 我が国では, 本田実信「イルカン国における IQṬĀ‘ 制について」『北海道大学文学部紀要』7(1959) (『モンゴル時代史研究』(東京大学出版会 1991) に「フラグ・ウルスのイクター制」にタイトルを変更して再録) によってその制度の全容がほぼ明らかになっている。封建概念の否定は, ラムトン A.K.S.Lambton によってセルジューク朝期のイクター制に対して主張が始められた(下記の佐藤の概観を参照)。通史的な最新の言及は, “Economy: v. From the Arab Conquest to the end of the Il-Khanids”, the article of *Encyclopaedia Iranica* (The Electronic Version), vol.8-1 <<http://www.iranica.com/articles/v.8f1/v8f1133v.html>> に見える。イスラーム世界全般のイクター制の研究史に関しては, 佐藤次高『中世イスラーム国家とアラブ社会』(山川出版社 1986), pp.5-15, T.Sato, *State & Rural Society in Medieval Islam. Sultans, Muqta's & Fallahun*, Leiden-New York-Köln 1997, pp.4-17. 封建概念と結びつけることが否定されるに至る研究史を確認することができる。ただし, イルハン朝下のイクター制に関しては, ここで問題としているペトルシェーフスキーの論にも基づいており(前者の p.9, 後者の pp.8-9), 注意を要する。
- (7) 注(1)に挙げた志茂論文を見よ。
- (8) 岩武昭男「ラシード区ワクフ文書補遺写本作成指示書」関西学院大学東洋史学研究室編『アジアの文化と社会』(法律文化社 1995), pp.283-85 参照。
- (9) *Waqfnāma-yi Rab‘-i Rashīdī*, ファクシミリ版: facsimile ed. (*al-Waqfiyya al-Rashīdiyya. The Act for the Pious Foundation Made by Rashīd-ad-Dīn Fazlulāh*), Tehran 1350/1971, 校訂版: ed. M. Minuwi & Ī. Afshār, Tehran 2536/1978. 前者のファクシミリ版と後者の校訂版を以下, [WRR/fac: x; /txt: y] の形式で各々ページを提示する。このイドラルの記述は, 次のような構成の下に書かれている。「アセルバイジャン州 (kūra) に属す, 首都 (dār al-mulk) [タブリーズ] とその地域の所有財 (amlāk) について」の表題を持ち [WRR/fac: 143; /txt: 113], 欄外に, 1 件の所有財が記載される。次ページは完全に読めない状態になっており [WRR/fac: 144] (校訂版では注記が施された上で連続している), 次ページにここに訳出したイドラルの記述がある [WRR/fac: 145; /txt: 114]。ただし, 訳出した記述の直前に 1 文があるが, その前半部が失われており, 意味をとりえない。
- (10) 前注に記したように, この記述に先立つ箇所が失われており, 具体的にどこを指

すのかは、決定できない。

- (11) 校訂版の“ba man banda”を“ba in banda”と読む。
- (12) 「ソユールガーミーシー」の語に関しては、G. Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*. Band 1, Wiesbaden 1963, pp.353-54 (no.229), 本田実信『モンゴル時代史研究』術語索引および pp.436-37 参照。
- (13) この「説明」に関する記述は、現存ワクフ文書には見られない。
- (14) WRR:/fac: 145-46; txt:114-15. Arwanaq, Rüdqāt, Mihrānrūd は、タブリーズのそれぞれ西方、北方、東方の地域 (nāḥiya) [cf. Ḥamd-allāh Mustawfi, *Nuzhat al-Qulūb*, ed. G. Le Strange, Leiden-London 1915, pp.78-80]。なお、本文の金額を加算すると1294ディーナール $\frac{11}{12}$ であるが、 $\frac{1}{12}$ の差をここでは問題としない。
- (15) ワクフ文書集『慈善集』に関しては、岩武昭男「ニザーム家のワクフと14世紀のヤズド」『史林』72-3(1989), pp.1-18 参照。Jāmi‘ al-Khayrāt, eds. I. Afshār & M. Taqī-dānīshpazhūh, (Intishārāt-i Farhang-i Īrān-zamīn 6), Tehran 1341/1962, および ed. I. Afshār, in *Yādgarhā-yi Yazd*, j. 2 Tehrān 1354/1975 の2種の校訂テキストを、以下の典拠提示では、JKh の略号を用い、前者と後者のページ数を単に“/”を用いて併記する。なお、A.K.S.Lambton, “Awqāf in Persia: 6th-8th/12th-14th Centuries”, *Islamic Law and Society*, 4-3(1997), pp.314-15 が『慈善集』を取り上げ、記載のイドラールを一部リストアップしている。1979年6月24-28日にエルサレムで開催された the International Seminar on Social and Economic Aspects of the Muslim Waqf の報告に基づく本論文は、以前よりその公表が予告されており (cf. A. K.S.Lambton, *Continuity and Change in Medieval Persia*, New York 1988, pp. 151, 55-57, 379), 長く期待されるものであったが、『慈善集』に関してはおよそ使用に耐えない。訂正されるべき箇所を3つに限定して挙げておく。そもそも本論文は、岩武「ニザーム家のワクフ」で明らかにした父子のワクフを、ルクヌッディーンのワクフ16件 (I 群), シャムスッディーンが父の遺志を継いで設定したワクフ6件 (II 群), シャムスッディーンのワクフ22件 (III 群) という形式で分類して収録しているという文書集の構成自体を全く理解していない。

・p.299:『慈善集』成立の日付“748/1347-1348”は校訂テキストの最末尾の日付を単純に採用しただけだが、成立の日付は冒頭に付されたカーディーの認可の日付 (733年ラジャブ月28日/1333年4月14日) である (cf. 岩武「ニザーム家のワクフ」p.16, 17-18 (note 9), JKh: p. 204/533)。

・p.307: ルクヌッディーンのワクフの管理権の継承に関する箇所で, “his son Ḥusayn” がムシュリフ職に就く」とするが、彼にはフサインなる息子はおらず、これは正しくは “Sharaf al-Dīn ‘Alī b. Diyā al-Dīn Husayn” というヤズドの名家ラディー家に嫁いだ彼の娘の子。シャムスッディーンのワクフの管理権の継承に関する箇所も個別の条件を全体の条件として誤っている (cf. 岩武「ニザーム家のワクフ」p. 40, 43 (notes 3, 4), JKh: pp.31, 50, 54, 165-68 (esp., 165-66)/412-13, 428, 431,

521-23 (esp., 521))。

・p.314:『慈善集』に収められたワクフを、父23件、子22件の計45件とするが、これは、Lambton が『慈善集』冒頭のワクフ対象施設リストが挙げる数字を単純に受け入れているだけで、『慈善集』収録のワクフは、44件（文書収録42件）である。問題となるのは、ワクフの収録数であろう（cf. 岩武「ニザーム家のワクフ」pp.10-14 (esp., 12-13), 18-38 (esp., 19), JKh: pp.5-10/393-97)。

(16) イドラールの追加登録は、『慈善集』の編纂時点を下限として時期設定できる。『慈善集』収録の文書は、独立した文書をそのまま収録したものではない。ただし、岩武「ニザーム家のワクフ」での取り扱い同様、1通ずつの文書として提示し、文書番号として、筆者が仮につけた文書群番号と文書番号を小稿でも用いるが、岩武「ニザーム家のワクフ」pp.12-13の構成表を参照。

(17) JKh: 74-75/447. 以下の『慈善集』からの引用の典拠に関しては、後述の一覧表参照。

(18) 当時の徴税システムにおける用語，“dafātīr”(<daftar), “dasātīr”(<dastūr), “mu‘amarāt”(<mu‘amara)の各意味に関しては、とりあえず、W.Hinz, *Die Resāliyye Falakiyyā*, Wiesbaden 1952 の語釈に従う。

(19) 訳文後半の“al-mawlā al-murtaḍā al-sa‘id” またルクヌッディーンであることは、前半の彼の尊称“al-mawlā al-murtaḍā al-a‘ẓam al-sa‘id” との一致より判断できる。

(20) Minovi, M. & V.Minorsky, “Nasīr al-Dīn Tūsī on Finance”, *BSOAS* 10-3 (1940), pp.760-61, 773.

(21) Muhammad Nakhjiwānī, *Dastūr al-Kātib fī Ta’yīn al-Marātib*, TOM II, ed. Али-заде, А.А., Москва 1976, pp.260-69. 以下“DK”と略称する。語釈は、DK: p.260, 第1の文書: pp.261-62, 第2の文書: pp.262-65, 第3の文書: DK:pp.265-69の構成となっている。

(22) そもそも『書記典範』は、イルハン朝崩壊後のジャライル朝期の文献であり、イルハン朝期の制度面の考究の参考になりこそすれ、直接の史料ではない。

(23) A.K.S.Lambton, “Mongol Fiscal Administration in Persia (Part II)”, *Studia Islamica* 65(1987), pp.120-21, TW: pp.631-32.

(24) 著名なガザンの財政改革の目的の一つは、バラートの在り方の改変であったが、バラート自体の廃止が行われたわけではない。本田実信「ガザン＝カンの税制改革」『北海道大学文学部紀要』10(1961)（『モンゴル時代史研究』に再録）にも明記されている（特に『モンゴル時代史研究』, pp.311ff. 参照）。

(25) JKh: 117-18/481. なお、…部のテキスト上の綴り（YNQMWN MShFQYN）では意味が把握できない。

(26) DK, pp.263, 64, 65. 第3の文書でも同様である（DK, pp.268, 69）。

(27) ただし、イドラールは相続による「永遠」が保証された制度であったので、同じ

く「永遠」を求めることを一つの目的とするワクフに設定する急務は発生しない。シャムスディーンのワクフに彼の得ていたイドラールの一部とはいえ登録が多いのは、ワクフ設定時に彼に娘1人しかいなかったためであろう(岩武「ニザーム家のワクフ」, p.43 (note 4) 参照)。したがって、本稿の分析は、そのあり方に関しては確証を得ることができるものの、彼らのイドラールの総額を示すものではない。

- (28) 注(6)提示の本田「イルカン国における IQṬĀ' 制について」, 『モンゴル時代史研究』, pp.242, 44 参照。

補注

原稿完成後、注(6)に挙げた Lambton の項目を含む *Encyclopaedia Iranica*, vol.8 が刊行された (Costa Mesa 1998, pp.107-32)。